

## 研究ノート「女子大生の交際確率を高める要因分析」

前田正子\*

### 【要約】

本稿では京阪神地区の女子大生に注目し、その交際状況を明らかにするために、第1に交際確率を高める要因、第2にどこで交際相手と知り合ったのか、第3にどのような相手と交際しているのかを分析した。京阪神地区の25の大学・短大に通う18~24歳の女子大生を調査対象とし、2012年の10月から2013年の2月にかけて調査を実施した。有効回答者数は1113人である。回答者のうち、交際相手が現在いる者が、33.6%であった。交際確率を高める要因としては、女子大よりも共学に通っていること、親と同居よりも別居していること、アルバイトをしていることなどだった。一般的に大学生は高学歴者としてひとくくりに分析されることが多いが、短大と大学を分け、さらに大学を偏差値で三分類し、全体を4つに分けてクロス集計したところ、大学の難易度によって、交際相手との出会いの場や交際相手の学歴や職業が異なっていることが分かった。

### 【キーワード】

女子大生, 交際, 共学, 親と別居

---

\* Hirao School of Management, Konan University

## 1. 研究の目的

日本における少子化の主たる要因とされるのが、未婚率の上昇である(河野、2007)。50歳時点での未婚者割合をもって推定される「生涯未婚率は」は1980年時点で男性2.6%、女性4.5%であったが、2010年時点では男性20.14%、女性10.61%となっている(国立社会保障・人口問題研究所、2013)。さらに同年の30~34歳の女性の未婚率は34.5%、35~39歳は23.1%となっている(『国勢調査』)。だが、結婚そのものが忌避されているわけではない。『第14回出生動向基本調査(独身者調査)』(2010年)(以下、『出生動向基本調査』)では18~34歳の未婚女子の89.4%が「いずれ結婚するつもり」と答えている。同じ調査で25~34歳の女性が結婚できない理由として最も挙げているのは「適当な相手にめぐり合わない」(51.3%)であり、この理由は1987年の調査開始以来、一貫して最も選ばれている。

三輪(2010)は、20~24歳では男性の34.8%、女性の23.7%、25~29歳では男性の20.3%、女性の11.3%が、「現在交際相手がいない」だけでなく、「今まで一度も交際経験が無い」ことを見つけ、結婚することが当たり前でなくなった時代状況であるからこそ、未婚者が結婚や交際について何を考え、何をしているのか研究することは必要であるとしている。また、石井(2010)は「結婚したくてもできない」人の多い日本と米国のデート文化の違いを取り上げ、米国では中学校段階から異性間のデートを促進する行事があり、対人間のコミュニケーション能力を培う機会があるが、日本では年齢的にギリギリの時期になって体験や練習も殆どなしに婚活をしなくてはならない問題点を指摘している。石井の論に立てば、例えば大学生時代の交際は、将来に向けての交際能力を養う機会でもある。それでは、日本における大学生の交際状況はどうなっているのだろうか。

そこで、本研究では、大学に在学する女子学生を分析の対象として、その交際の実態を明らかにすると共に、こういった要因が交際確率を高めているかを探ることを目的とする。

## 2. 問題の背景と先行研究

これまで、夫婦になったカップルを分析し、その出会いや交際についての研究は多くなされている。例えば、夫婦の出会ったきっかけの上位3つを見ると、「職場や仕事で」が29.3%、「友人・兄弟を通じて」が29.7%、「学校で」が11.9%となっている(『第14回出生動向基本調査(夫婦調査)』)。岩澤・三田(2005)、岩澤(2010)は、1970年代以降の初婚率の低下は、見合いといったフォーマルな紹介や職場での出会いの減少で殆ど説明できると分析している。「結婚したい」と望みつつも、職場や見合いでの出会いに期待できないのであれば、それに代わる出会いや交際がなければ、未婚者は増えることになる。

岩澤(2006)は結婚相手と出会ったきっかけについて、スウェーデン・フランス・

アメリカ・日本・韓国の国際比較から、女性ではどの国でも高学歴者では「学校」や「学校以外のサークル活動」での出会いが多くなっていることを見つけている。また白波瀬（2011）は、高学歴層は学校や職場で知り合い、低学歴の者は家族親族、近所で知り合うが、特に高学歴の女性については大学が重要な結婚市場であると述べている。

また Mare（1991）は、米国におけるカップルの出会いの 50 年間の変遷を分析し、人々が高学歴化し、在学期間が長くなるにつれて、学校が重要な出会いの場になり、学歴内婚性が強まっていると論じている。同じく志田・盛山・渡辺（2000）は、日本の夫婦の分析を行い、結婚においては階層よりも学歴が強い影響を持ち出しており、学歴に本人がこだわってなくても、出会いのきっかけなどで学歴内婚性が存続しているとしている。しかし、これらの研究は、結婚したカップルを取り上げて、その出会いを分析したものである。また「見合い」や「職場や仕事で」の出会いが減少しているのであれば、今後は学校が一層、重要な出会いの場となる可能性が考えられる。

だが、交際がどういうきっかけで結婚に結び付くのかといったプロセスや、交際そのものを調査研究したものは少ない。そこで、今回は、学生の交際の実態について調査分析をするものである。

### 3. 分析の仮説

今回の分析にあたって仮説として、交際の確率を上げる要因を以下のように考えた。

1. 女子大に比べ、共学の方が交際確率が高い
2. アルバイトをしている方が、交際確率が高い
3. 年齢が上がるほど、交際確率が高い
4. 男兄弟がいる方が、交際確率が高い
5. 親と別居している方が、交際確率が高い
6. 親が離死別している方が、交際確率が高い
7. 母親の学歴が、交際確率に何らかの影響をもたらす

以上のように考えたのは、1. 共学であること、2. アルバイトをしていること、3. 年齢があがること は、それだけ異性に会えるチャンスが多くなると考えたからである。4. 男兄弟がいれば、兄弟を通じての出会いも増えると考えた。また、5. 親との別居や 6. 親の離死別は、親の監督が弱まり、行動の制約が無くなるため、交際が自由になる。また、7. 母親の学歴が交際に何らかの影響を与えるのではないかと考えた。

例えば石川（2013）によると母子家庭の場合、女子高校生の性交経験率が上がるが、それは家計の問題からアルバイト頻度が高く、それが様々な異性との出会いをもたらすためであると分析しているからである。さらに本田（2008）は、母親の学歴によっ

て子どもへの教育姿勢が変わるとしているが、それが男女交際にも影響を及ぼす可能性について検討する。

また、出会いの場の違いをもたらす要因として 8. 学校の難易度の差は、出会いの場や交際相手に違いをもたらすと予測した。一般的に多くの調査では、大学生は高学歴層としてひとまとめの集団として分類されているが、橘木(2008)は、女性の大学進学を分析し、1980 年代後半生まれの世代から女子の大学進学者の中でも、難関大学に進む層とごく普通の大学・短大に進学する層に分かれているとしている。そこで、在学校の難易度の違いによって交際の差も存在するのか、についても確認してみたい。

#### 4. 調査の概要と対象者

今回の分析に使用するデータは『女子学生の結婚と出産に関する意識調査』で得たものである。調査期間は 2012 年の 10 月から 2013 年の 2 月である。調査員が担当教員の許可を得られた各大学の授業を訪問し、調査の目的を説明した上で学生に調査協力を依頼した。調査に同意した学生のみが調査票に記入し、その場で調査員が調査票をすべて回収した。

結果、京阪神(京都・大阪・兵庫)の 25 大学で 18 歳から 24 歳までの女子学生 1,350 人に調査票を配布・回収し、うち 1,113 人分が有効回答の調査票であった。筆者が許可を得ることができた教員のクラスでの調査であるため、物理的に京阪神地区の大学のみでの調査となり、スノーボールサンプルである。

調査内容は三つの項目に分類され、I.アルバイトや奨学金・家族などの状況、II.結婚に対する意識や交際状況、III.妊娠や出産に関する知識の有無、である。調査票の I は日本学生支援機構の『平成 22 年学生生活調査』、II は国立社会保障・人口問題研究所の『出生動向基本調査』(独身者表)を参考に作成し、III は筆者が質問を考案した。

表 1 回答者の所属大学先(単位：実数及び%)

大学分類	共学	女子大学	計	割合 (%)	全国の女子学生割合
大学	566	327	889	80.2	89.8
短期大学	175	45	220	19.8	10.2
計	741	372	1113	100.0	100.0

回答者が所属する大学数は 25 校である。内訳は 4 年制大学が 20 校、短期大学が 5 校、共学は 16 校で女子大学は 9 校であり、人数は表 1 にまとめた。全国的女子学生の 2012 年度の状況をみると(文部省、2012)、大学で約 110 万人、短期大学が約 12.5 万人であり、女子学生全員に占める短大生の割合は 10.1%となっているが、この調査回答者に占める短大生の割合は 19.8%と多くなっている。

さらに表 2 からわかるように、回答者は 1-2 年生が多い。これは短大生が多い要因だけではない。大学の 1-2 年生の一般教養講義等では多数の回答者が確保できるが、3-4 年生の場合はクラスが小さく、調査協力者の確保が困難であったためである。

**表 2 回答者の学年・年齢分布 (単位：実数及び%)**

学年	割合 (%)	年齢	割合 (%)
1 年	31.9	18 歳	11.3
2 年	35.4	19 歳	28.8
3 年	19.0	20 歳	31.0
4 年	11.4	21 歳	19.8
5 年以上	0.4	22 歳以上	8.9
無回答	1.7	無回答	0.3
計(実数)	100 (1113)		100 (1113)

また女子学生を短大生と大学生に分け、さらに大学生を偏差値に応じて 3 つに分けた人数を表 3 に示した<sup>1</sup>。

**表 3 短大・大学・偏差値による 4 分類 (単位：人)**

短大・大学と偏差値による分類	短大	大学 1 (下位)	大学 2 (中位)	大学 3 (上位)
実数 (N)	220	157	503	233

## 5. 交際の状況

### 5-1. 属性別にみた交際相手の有無

それでは女子学生たちには交際相手がいるのだろうか。結果は表 4 にまとめた。女子学生に「恋人として交際している異性がいるか」と尋ねたところ、回答者の中で交際相手がいる者は 33.6%である。

ちなみに『出生動向基本査』(2010)では、「恋人として交際している異性がいる」と、「友人として交際している異性がいる」の選択肢があるが、本調査では「恋人として」のみ聞いている。プレ調査の際に女子学生に尋ねたところ、「異性の友人との付き合いは交際とは言わない」と答えたためである。『第 14 回出生動向調査(独身者調査)』では、「恋人として交際している異性がいる」と答えた女性は 18~19 歳で 26.0%、20~24 歳で 36.8%である。一方、青少年研究会が 2012 年に実施した調査によると 16 歳から 29 歳までの回答者のうち、女子学生では 27.7%が「現在恋人がいる」、同じく 27.7%

<sup>1</sup> 調査対象になった短大はすべて偏差値下位に属していた。

が「恋愛経験有り」と答えている。

属性別に交際相手がいる者の比率をみてみよう。表4に見るように統計的に有意な差を示しているものを見ると、年齢別では、18歳は23.2%、19歳は23.9%、20歳は37.9%、21歳は40.1%、22歳以上で49.5%となっている。また女子大では27.6%だが共学では36.5%、親と同居していると31.8%だが、別居していると38.3%、アルバイトをしていないと14.9%、していると35%、親が離死別していないと31.9%だが、していると45.5%、となっている。一方、学校の違いや母親の学歴、男兄弟の有無は交際率に影響を与えていない。

表4 主要属性別にみる交際相手のいる割合

属性	交際相手のいる割合 (%)	N (実数)	検定
全体	33.6	1105	
所属学校			
短大	35.3	218	
大学1	28.8	153	
大学2	34.1	501	
大学3	33.9	233	
女子大	27.6	366	**
共学	36.5	739	
親と			
同居	31.8	762	
別居	38.3	303	*
アルバイト			
していない	14.9	74	***
している	35.0	1030	
年齢			
18歳	23.2	125	***
19歳	23.9	318	
20歳	37.9	343	
21歳	40.1	217	
22歳以上	49.5	99	
親が			
離死別していない	31.9	951	***
離死別している	45.5	145	
母親の学歴			
中・高卒	33.6	393	
短大・専門学校	34.5	388	
大学	33.1	275	
不明	28.6	49	
男兄弟			
いない	31.2	490	
いる	35.4	615	

\*\*\*:P<0.001 \*\*P<0.01 \*P<0.05 #:p<0.1

## 5-2. 交際の確率を高める要因分析

次にそれぞれの要因が交際の有無にどのような影響を及ぼすのか、先に上げた分析の仮説の1から7を検証するため、ロジスティック回帰分析を行った。分析に使用するのは表5にまとめた変数の情報がすべてそろっている、1,055人のサンプルである。

## (a)被説明変数

交際相手がいる、いないを被説明変数として交際相手有りを1、無しを0とした。

## (b)説明変数

表5 被説明変数と説明変数の基本統計量

変数名	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
交際相手がいる	1055	0.337	0.473	0	1
所属学校 短大	1055	0.193	0.395	0	1
大学1 (下位)	1055	0.140	0.347	0	1
大学2 (中位)	1055	0.455	0.498	0	1
大学3 (上位)	1055	0.211	0.408	0	1
共学か否か	1055	0.669	0.471	0	1
本人の年齢 18歳	1055	0.110	0.313	0	1
19歳	1055	0.292	0.455	0	1
20歳	1055	0.308	0.462	0	1
21歳	1055	0.200	0.400	0	1
22歳	1055	0.090	0.286	0	1
親と別居	1055	0.286	0.452	0	1
親が離死別	1055	0.130	0.336	0	1
アルバイトをしている	1055	0.935	0.247	0	1
母親の学歴 中卒高卒	1055	0.357	0.479	0	1
短大・専門学校	1055	0.354	0.479	0	1
大学	1055	0.249	0.432	0	1
不明	1055	0.039	0.193	0	1
男兄弟の有無	1055	0.559	0.496	0	1

変数の記述統計量については被説明変数も含め表5にまとめたが、説明変数としては以下のものを投入した。まず短大・大学の偏差値分類でダミー変数を作成した。短大、大学1 (下位)、大学2 (中位)、大学3 (上位) それぞれ該当学校の学生であれば1、そうでなければ0とした。また共学=1、女子大=0、本人の年齢は18から22までダミー変数を作成したが、22歳以上は22にまとめた。親と別居では別居=1、同居=0、親が離死別していると=1、していないと=0、アルバイトをしていると=1、していないと=0、母親の学歴は中・高卒、短大・専門学校卒、大学卒でそれぞれダミー変数を作成した。また、兄弟の紹介の効果を見るため、男兄弟が有り=1、なし=0とした。

### (c)分析結果

分析の結果は表 6 のようになった。係数はオッズ比である。この分析では、交際相手有りに対して、オッズ比が 1 より大きいなら正の効果、1 未満なら負の効果の意味する。女子学生の在学に関しては大学 1 (下位)、年齢は 18 歳、母親の学歴に関しては、中・高卒が基準カテゴリーとなっている。

モデル 1 は所属先学校と年齢を入れた。これを見ると、共学であると女子大に比べて 1.46 倍、交際相手がいる確率が高まり、年齢が上になるとオッズ比が上がっている。モデル 2 はモデル 1 に「親と別居かどうか」の変数を入れた。オッズ比は「親と別居している」と「親と同居」に比べ 1.39 倍交際確率が上がることを示している。

モデル 3 は、モデル 2 に「アルバイトをしているかどうか」の変数をいれた。アルバイトをしているとしていない者に比べ、オッズ比が 2.5 となっている。ただし、アルバイトをしていない者は、1,055 人のうちのわずか 69 人であり、アルバイトをしていない者には別の背景があるのかもしれない。

モデル 4 はモデル 3 に「親が離死別しているかどうか」を入れた。そうすると、親が離死別していると、そうでない場合に比べ、1.63 のオッズ比になっている。

モデル 5 は本人の年齢の変数を抜き、母親の学歴と男兄弟の有無を入れた。母親の学歴は有意ではない、男兄弟の有無も影響がなかった。母親の学歴は、娘が大学生になった時点での交際相手の有無に対しては影響が見られなかった。

これらをみると、学校が共学であること、年齢が上であること、親と別居していること、親が離死別していること、アルバイトをしていることが交際相手有りの確率を上げる。先に上げたように、石川 (2013) によると母子家庭という要因ではなく、アルバイト頻度の高さが異性との出会いをもたらすため、交際が活発になると分析している。しかし、今回の分析ではアルバイトの影響だけでなく、親の離死別そのものが交際相手有りに正の影響をもたらしている。これに関してはさらなる検証が必要だろう。

表6 ロジスティック回帰分析による「交際相手の有無」のオッズ比

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5
所属学校 短大	1.24	1.21	1.12	1.09	1.00
大学1 (下位) †	(1.00)	(1.00)	(1.00)	(1.00)	(1.00)
大学2 (中位)	1.10	1.09	1.03	1.04	1.07
大学3 (上位)	1.03	1.00	0.96	0.98	0.96
共学か否か	1.46*	1.45*	1.39*	1.39*	1.40*
年齢 18歳 †	(1.00)	(1.00)	(1.00)	(1.00)	
19歳	0.99	1.01	0.94	0.94	
20歳	1.84*	1.90**	1.77*	1.75*	
21歳	2.13**	2.24**	2.02**	2.00**	
22歳	3.21***	3.35***	3.20***	3.17***	
親と別居		1.39*	1.43*	1.43*	1.35*
両親が離死別				1.63*	1.66**
アルバイトあり			2.5**	2.44**	2.64**
母学歴 中卒高卒 †					(1.00)
短大・専門学校					1.05
大学					0.85
不明					1.09
男兄弟の有無					1.17
	N 1055				
	Prob>chi2	Prob>chi2	Prob>chi2	Prob>chi2	Prob>chi2
	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	Pseudo R2				
	0.033	0.036	0.042	0.049	0.023
	Log	Log	Log	Log	Log
	Likelihood	Likelihood	Likelihood	Likelihood	Likelihood
	d -652.55	d -649.98	-645.97	-641.68	-642.04

\*\*\*:P<0.001 \*\*P<0.01 \*P<0.05 #p<0.1 †は基準カテゴリー

## 6. 出会いと交際相手の状況

### 6-1. 出会いの状況

それではこの交際相手と、女子学生はどこで出会ったのだろうか? 「どこで知り合ったのか」の選択肢は6つある。「学校で」「学校以外のサークル・クラブ活動」「アルバイトで」「幼馴染・隣人、友人や兄弟の紹介」「合コンやインターネット・ナンパ」

「その他」である。また「その他」と「無回答」を「不詳」としてまとめた<sup>2</sup>。

結果は表7にまとめた。そうすると「学校で」「学校以外のサークル・クラブ活動」で知り合った者の比率が在-schoolによって違うことが分かる。例えば「学校で」で知り合った者は短大では20.3%であるが、大学の下位・中位・上位の順でみると33.3%、42.8%、43.0%となっている。また「学校以外のサークル・クラブ活動」では短大から同順に3.8%、10.4%、16.8%、31.6%となっており、偏差値の上位層になるほど学校や学校以外のサークルなどでの出会いが多くなっている。

一方、「幼馴染・隣人、友人や兄弟の紹介」「アルバイトで」は逆の傾向がみられる。「幼馴染・隣人、友人や兄弟の紹介」は同順で26.6%、14.6%、12.1%、8.9%、また「アルバイト」では同順で25.3%、22.9%、15.0%、7.6%と上位層では減少している。大学生ではどのレベルでも交際相手と最も知り合ったのは学校であるが、短大生の場合は、むしろ「幼馴染・隣人、友人や兄弟の紹介」や「アルバイト」がどちらも約4分の1を占め、学校での出会いを上回っている。

今回の分析では交際相手との出会いでは、短大生と大学生の間で差異があるだけでなく、大学生の中でもさらに大学の難易度によって違いあることが分かった。カイ二乗検定をすると、女子学生全体でも、短大生を抜いた大学生だけで検定しても、出会いの場の違いは有意である。

表7 交際相手とどこで知り合ったかのパーセント分布

	学校で	学校以外の サークル・ クラブ活動	アルバイ ト	幼馴染・隣 人、友人・兄 弟の紹介	合コンやナ ンパ・インタ ーネット	そ の 他・不 詳	計
全体	36.9	16.4	16.6	14.8	6.6	8.7	N
短大	20.3	3.8	25.3	26.6	8.9	15.2	79
大学1 (下位)	33.3	10.4	22.9	14.6	6.3	12.5	48
大学2 (中位)	42.8	16.8	15.0	12.1	6.4	6.9	173
大学3 (上位)	43.0	31.6	7.6	8.9	5.1	3.8	79

女子学生全体では  $p=0.000$  短大生を抜いた大学生だけでは  $p=0.041$

## 6-2. 交際相手の学歴と職業

それでは女子学生はどのような相手と交際しているのだろうか。

交際相手の学歴については表8にまとめた。交際相手の年齢は18歳以下が18名のみであるので、現在の学歴がほぼ交際相手の最終学歴と考えられる。これをみると交際相手の学歴が高校である割合は、短大から大学の下位から順に見て34.4%、19.5%、

<sup>2</sup> 調査では、「合コンで」「ナンパで」「インターネットで」と選択肢は分かれていたが、選択者が少なく、本稿の分析では3つを足し合わせた。

7.9%、2.9%と偏差値が上がるにつれて減っていくが、逆に大学・大学院の割合は同順で46.9%、68.9%、81.7%、96.1%と増加していく。つまり上位校に在籍する女子学生の交際相手ほど、学歴が高くなっていることがみられる。この交際相手の学歴分布について検定してみた。女子学生全体でも、短大生を抜いた大学生だけで検定しても、交際相手の学歴分布の違いは統計的な有意差を示している<sup>3</sup>。

表 8 交際相手の学歴のパーセント分布

	中学	高校	専修・短大	大学・大学院	N
全体	2.0	13.0	8.1	76.9	346
短大	4.7	34.4	14.1	46.9	64
大学 1 (下位)	2.4	19.5	9.8	68.3	41
大学 2 (中位)	1.8	7.9	8.5	81.7	164
大学 3 (上位)	0.0	2.6	1.3	96.1	77

女子学生全体では  $p=0.000$  短大生を抜いた大学生だけでは  $p=0.005$

交際相手の職業については表 9 にまとめた。交際相手の職業が「正規の職員」である場合をみると、短大から大学の偏差値が上がるにつれ 43.7%、21.4%、18.8%、18.7%と減少している。一方、「学生」でみると同順に 38.0%、64.3%、75.2%、70.7%と増加する。ちなみにこれも検定してみたが、女子学生全体では  $p=0.000$  と統計的に有意だが、短大生を抜いた大学生だけでは統計的有意差が無くなる。

つまりに交際相手の職業に関しては、学生が短大生か大学生かで違いがみられる。短大生の交際相手は、学生よりも働いている「正規の職員」や「パート」の方が多くなり、大学生の場合は交際相手の多数が学生となる。

<sup>3</sup> 多様な学歴や職業の異性にあった場合に、実際につきあうかどうかは本人の選好によるだろう。本調査では女子学生には「結婚相手を決めるとき、その学歴をどの程度重視するか」を聞いているが、「重視する」「考慮する」を合わせると、短大から大学の偏差値が上がるにつれて、40.3%、46.4%、72.6%、76.0%と比率が上昇しており、上位校ほど相手の学歴にこだわっている。

表 9 交際相手の職業のパーセント分布

	正規の 職員	パート	派遣・ 契約	自営業	無職	学生	N
全体	24.1	5.9	3.4	0.8	0.3	65.4	353
短大	43.7	12.7	2.8	2.8	0.0	38.0	71
大学 1 (下位)	21.4	2.4	9.5	0.0	2.4	64.3	42
大学 2 (中位)	18.8	3.6	1.8	0.6	0.0	75.2	165
大学 3 (上位)	18.7	6.7	4.0	0.0	0.0	70.7	75

女子学生全体では  $p=0.000$  短大生を抜いた大学生だけでは  $p=0.159$

### 6-3. 出会いと交際相手の状況から

ここまで女子学生の出会いのきっかけと交際相手の状況について見てきた。そうすると偏差値上位校の女子学生は大学や大学以外のサークルなどで大学生である交際相手と出会う。また、在-schoolによって大きな差を示しているのが「大学以外のサークル」での出会いである。これは上位校では 31.6%であるが、短大では 3.8%しかないだけでなく、大学生比較でも上位校ほど学外での出会いが多くなっている。大学によって学外活動の活発度が違うということであろうか。また短大生の場合は在学期間短く、週当たりの授業時間数が多いため、学外活動に参加する機会が少ないことも考えられる。

一方、短大生にとっての代替りの出会いの場は「友人や兄弟の紹介」であり「アルバイト」である。女子学生にはアルバイトの頻度についても聞いているが、短大生は大学生に比べアルバイトの頻度が高い<sup>4</sup>。小嶋 (2011) は、高校生のアルバイト状況を調査し、家計にゆとりが無いと、高校生段階からアルバイトをせねばならず、教育費を抑えるため 4 年生大学より短大に進学する傾向を確認している。今回の調査でも、短大生はアルバイトの頻度が高くなっている。そのため、アルバイトでの出会いが多くなると推測される。さらに、昨今、短大では共学化を進めつつあるが、実際には女子学生に比べ圧倒的に男子学生が少なく、学内での出会いが無いという要素も考えられる。

また、表 10 には出会いのきっかけ別での交際相手の職業の分布についてまとめた。左端のたて列を出会いのきっかけで分類し、その出会い別に交際相手の職業分布を横にまとめている。アルバイトで知り合った場合は、交際相手の職業は「正規の職員」42.9%、「パート」9.5%、「学生」41.3%となり、社会人の比率が学生を上回っている。このように出会いのきっかけの違いが、交際相手の職業の違いにもつながっていることが分かる。

<sup>4</sup> 短大生だけでみるとアルバイトが「週 3 日以上」が 62.3%、「週 1~2 日」が 28.8%となっており、大学生のみでは同順で 52.5%と 40.3%となっている。

表 10 出会いのきっかけから見た交際相手の職業のパーセント分布

	正規の 職員	パート	派遣・ 契約	自営業	無職	学生	N
学校で	10.3	2.2	2.2	0.0	0.0	85.3	136
学校以外のサ ークル	11.9	5.1	0.0	0.0	0.0	83.1	59
アルバイト	42.9	9.5	4.8	1.6	0.0	41.3	63
幼馴染・隣人 ・友人兄弟 の 紹介	40.0	7.3	9.1	1.8	1.8	40.0	55
合コンやナン パ・インター ネット	47.8	8.7	0.0	4.3	0.0	39.1	23

p=0.000

## 7. まとめと本分析の限界について

本研究では、短大・大学に通う女子学生を対象とし、第 1 に交際確率に影響する要因、第 2 に交際相手との出会い、第 3 に交際相手の状況についての分析を試みた。そうしたところ、交際相手の有無には在学校の違いは関係が無く、交際確率に正の効果をもたらすのは、共学であること、親と別居していること、親が離死別していること、アルバイトをしていること、また年齢が上であることだった。母親の学歴や男兄弟の有無は関係なかった。

一方、交際相手との出会いや交際相手の学歴や職業に関しては在学校による差異が見られた。出会いでは、偏差値上位校ほど「学校」もしくは「学校以外のサークル」での出会いが多くなり、短大や下位校ほど「アルバイト」や「友人や兄弟の紹介」が多かった。交際相手の学歴や職業に関しては、在学校によって違いがみられた。短大と大学の違いだけでなく、大学生だけ取り上げて難易度の高い学校に通う女子学生の交際相手の方が、より学歴が高くなっている。一方、交際相手の職業に関しては、短大生では社会人が学生を上回っており、大学生と異なっていた。大学生のみの比較では、交際相手の多数が学生であり、大学間での差異はなかった。

これまでの交際や結婚などの調査では、大学生は同じ高学歴層として分類されることが多い。だが、同じ大学生であっても、さらに在学校の難易度の違いによって、出会いのきっかけが違ふことや、交際相手の学歴・職業なども異なっていることが、今回の調査では見られた。

一方、今回の調査の限界もある。大学の難易度の差が、なぜ交際相手との出会いの

場の差をもたらすのかについては探れていない。上位校に進学する学生が対人能力に優れていたり、稲葉 (2011) のようにソーシャル・キャピタルが豊富であるため、大学以外のサークル活動などにも活発に参加し、そこでの出会いが生まれるのか。もしくは大学そのものに、学外活動を奨励したり、交際を促す文化があるのかどうか、というところは本調査では分からないからである。これらについては、今後の検討課題としたい。

本研究は、文部科学研究費基盤研究 C 研究課題番号 23530296 (2011~2013) 「世帯の意思決定と政策・労働・消費のマクロ的要因との関係の国際比較」(研究代表吉田千鶴) の研究助成を受けて行われた。深謝申し上げる。

### 参考文献

- 石井クンツ昌 (2010) メリカ社会から見た現代日本の『婚活』『婚活現象の社会学』  
山田昌弘編、東洋経済新報社,187-224.
- 石川由香里 (2013) 「青少年の家庭環境と性行動」『若者の性白書』日本性教育教会編,  
小学館,63-80.
- 稲葉陽二 (2011) 『ソーシャル・キャピタル入門』中央公論新社.  
岩澤美帆・三田房美 (2005) 「職場結婚の盛衰と未婚化の進展」『日本労働研究雑  
誌』 pp.535,16-28.
- 岩澤美帆 (2006) 「結婚」『少子化社会に関する国際意識調査報告書』内閣府政策統括  
官, pp.73-100.
- 岩澤美帆 (2010) 「職場結婚の盛衰から見る良縁追求の隘路」『結婚の壁』佐藤博樹・  
永井暁子・三輪哲編、勁草書房,pp37-53.
- 河野稠果 (2007) 『人口学への招待』, 中央公論新社.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2012) 『第 14 回出生動向基本調査 結婚と出産に関  
する全国調査 独身者調査の結果概要』  
([http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/doukou14\\_s.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp)) 2012 年 4  
月 5 日取得.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2013) 『人口の動向 日本と世界』厚生労働統計協会.
- 小島俊樹 (2011) 「拡大する貧困層世帯の高校生とアルバイトとの関連性」『人間文化研究』  
名古屋市立大学大学院人間文化研究科,第 15 号,179-192.
- 志田基与師・盛山和夫・渡辺秀樹 (2000) 「結婚市場の変容」『日本の階層システム 4  
ジェンダー・市場・家族』盛山和夫編、東京大学出版会, pp.157-176.
- 白波瀬佐和子 (2011) 「少子化社会の階層構造—階層結合としての結婚に着目して」『現  
代の階層社会 2』東京大学出版会.
- 橘木俊詔,2008,『女女格差』東洋経済新報社.  
日本学生支援機構, 2012, 『平成 22 年度学生生活調査結果』  
([http://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_chosa/documents/data10\\_all.pdf](http://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/documents/data10_all.pdf))  
2012 年 5 月 6 日取得.
- 文部省 (2012) 『平成 24 年度版学校基本調査』.
- 三浦哲 (2010) 「現代日本の未婚者の群像」『結婚の壁』佐藤博樹・永井暁子・三輪哲  
編, 勁草書房,pp.13-36.
- 本田由紀 (2008) 『家庭教育の隘路』勁草書房.
- Mare, R. D. (1991), Five Decades of Educational Assortative Mating, American Sociological  
Review, 56(1) (Feb,1991), pp.15-32.